脱獄ガッパ　ガラ丸　神乃観山の冒険

4　水流の技

ガラ丸の脱獄犯としての手配書は、すでにいろいろなところにまわっているはずだ。キク雄も、ガラ丸と行動を共にするかぎり、あまり目立つわけにはいかない。二人は、人通りの多い街道をよけながら旅をすることになる。

ガラ丸とキク雄は、街道を外れた道を西へ西へと歩いて進む。

旅を始めてから五日目のことだった。もうだいぶ東の都からも離れた。あと二日も歩けば、神乃観山を流れる奥室川の下流にたどり着くだろう。ガラ丸もようやく旅に慣れてきた。そして、旅を続けながら、ガラ丸は水流の技を練習したり、キク雄に剣術の稽古をつけてもらったりしていた。

人目を避けて裏街道を行く旅である。人通りが少ない分、旅人をねらう追いはぎどもに襲われる可能性が高い。ガラ丸は、小さい頃から剣術の道場に通っていただけあって、キク雄に言わせれば

「なあに、ガラ丸さまなら、このあたりのチンピラどもに引けを取ることはありません」

ということであった。ガラ丸は今の自分がどれくらいの強さなのか、自分ではさっぱり分からなかったが、あまり気にはしていない。

ガラ丸自身は、「強くなりたい」ということよりも、水流の術や、キク雄に

教わる剣の型を身に付けるのがただただ面白くて、①ひまさえあれば稽古に励んでいる。それでも、キク雄が身に付けている『鏡水流』という技を体得するには、まだまだ長い修行の道のりがあるらしい。

その日、二人はちょっとした山越えの道を進んでいた。山越えと言ってもそれほど大変ではない、平地が少し盛り上がったような小さな山である。木々の緑の間からふいてくるウ心地良い風を感じながら、なだらかな坂道をゆっくり歩いてた。ようやく梅雨も明けようかという時期で、これからェ本格的な夏がやってくるのだが、この日はほどよい風のおかげで暑さがやわらぐ。

キク雄が、

「ガラ丸さま、今日はいい天気ですね。」

と声をかけるが、ガラ丸の口がいやに重たい。

「どこか具合でも悪いのですか？」

「いや、そうじゃないんだ。なんだか、この先に黒い雲のような気配を感じるんだ。」

「ええ？」

キク雄はおどろいて、あたりをキョロキョロと見回す。

「冗談言っちゃいけませんよ、ガラ丸さま。黒い雲って、一体何が起こるっていうんですか。」

育ての親であるヒサ次郎が「ガラ丸は勘がするどい子だ」とよく言っていたのをキク雄は思い出す。

坂が下りに変わり、林の道を抜けて少し視界がひらけた先に、ガラ丸は異変を感じた。

旅姿をしている二人のオオカミを、人相の悪いやくざ者の集団七、八人が短刀や木刀を手にとり囲んでいる。長い槍を持ってる者もいた。イノシシ、タヌキ、オオカミなどいろいろなやつが混じっている。このあたりの山をなわばりにして、旅人などを襲っている連中にちがいない。

「運のないオオカミさんだ。こちらも面倒に巻き込まれるのはごめんです。ガラ丸さま、どこかにかくれて②やり過ごしましょう。」

キク雄が言い終わらぬうちに、もうガラ丸は走りだしていた。囲まれているオオカミたちを助けるつもりらしい。

「ちょっと、ガラ丸さま！」

ガラ丸は、一直線にオオカミを取り囲むやくざ者たちに向かって行く。

「もう、しょうがねえなあ。なんだってあんな風に後先考えずに飛び出しちまうかねえ。」

キク雄はあきれてガラ丸の後を追う。

やくざ者たちが、走りながら近づいて来るガラ丸の姿に気がついた。

「おいおい、なんかやって来たぜ」

短刀を手にしたイノシシが言うと、そばにいた目つきの鋭いタヌキが槍の向きをぐるりと変えて、

「なんだ、長いのを持っていやがる」

ガラ丸の腰の刀を見て吐き捨てるように言った。やくざ者たちが今度はガラ丸を取り囲みはじめると、ガラ丸はゆっくりと刀の柄に手をかけて言う。

「よく分からないが、そちらのオオカミさん方に助太刀いたす。お前ら絶対に悪いやつらだ」

決めつけるガラ丸を見たやくざ者たちは、ヘラヘラ笑っている。こんな若いカッパ一人が何をいきがっているんだと言いたげである。

「悪いやつらだ？　おい、聞いたかおめえら」

「ああ、聞いた。てめえふざけてんじゃねえぞ。切り刻んでカッパ汁にしてやろうか。もっとも、そんなにうまくはねえだろうがな。だははは」

やくざ者たちが口々に言うすきに、ガラ丸はさっと刀を抜いた。抜いたと同時に、その刀の切っ先から水の固まりが鉄砲玉のように飛び出し、手前にいた目つきの悪いタヌキの腹に命中した。腹に水鉄砲をくらったタヌキは、たまらず口から泡を吹いてその場にたおれこむ。それを見た周りのやくざ者たちは、一気に顔を（　ー　）た。

「おい、このカッパ野郎、術を使うぞ、気をつけろ」

先ほどまでのヘラヘラした感じはすっかりなくなって、やくざ者たちは戦闘モードになってガラ丸に対して構えを取った。

すると、いつの間にかキク雄がガラ丸の横に来ている。

「ガラ丸さま。あぶのうございます。」

声をかけたキク雄が、ガラ丸の前に立つと、体勢を斜に構えてぶつぶつと何

かロの中で唱(とな)え始めた。ガラ丸は、ほほに、冷たい水しぶきが二、三滴(てき)かかるのを感じた。と次の瞬間(しゅんかん)にはもうキク雄の姿(すがた)が見えない。

これがキク雄の言っていた鏡水流(かがみすいりゅう)という技(わざ)か。

キク雄の姿(すがた)が見えなくなったと思ったときには、透明(とうめい)なうず巻(ま)きのようなものが右へ左へとくるくる回っている。そのうず巻(ま)きが、やくざ者たちにおそいかかっていった。やくざ者たちは、次から次へと「うぐっ」「あうっ」と声をあげてたおれていく。

あっという間の出来事だった。

最後の一人をたおし終わったとき、透明(とうめい)うず巻(ま)きがキク雄の姿(すがた)にもどる。

「なあに、殺しちゃいません。ささ、こいつらが立ち上がる前に、さっさとずらかりましょう。」

キク雄はガラ丸と、二人のオオカミを促(うなが)した。

「かたじけない。」

オオカミたちはキ深々と頭を下げ、キク雄とガラ丸の後について歩き出した。

5　オオカミのマウリ

「キク雄さんって、やっぱり強いんだね。」

ガラ丸がしみじみ言うと、キク雄は

「ガラ丸さま。年寄りをからかっちゃいけません。あんなところでああいう風に旅人を襲うような連中に、本当に恐ろしいやつはいないものですよ。」

さらりと返した。

それからもうだいぶ歩いたところで、アいっこうは荷をいったん下ろして休けいした。オオカミが背中にかついでいた荷物は、それほど大きくは見えないけれども、ずっしりと重たそうであった。荷物を下ろしたところで、ずっと黙ってついてきていた二人のオオカミは、それぞれ名を明かした。

「私はマウリと申します。先ほどの助太刀、重ねてお礼申し上げます」

後の一人はギウリと名乗った。

「この荷をかついでいると、身のこなしが悪くなり、先ほどのような連中にも後れをとってしまいます」

この二人は、長旅を終えて山に帰っているところであるらしい。

マウリは、体の大きさで言えば、ガラ丸の二倍はあろうかというでかいオオカミであった。しかし、見た目の迫力とはちがってやたら礼儀がよい。言葉づかいもていねいだ。

そんなオオカミたちを見て、キク雄が先ほどから感じていることは、二人の

オオカミは、十分に強いだろうということだった。したがって、わざわざガラ丸と自分が助けなくても、この二人は、あのやくざ者たちをやっつけていただろう。ガラ丸が後も先も考えずに突っ走ってしまったために、関わりを持ってしまったが、このオオカミたちも裏道を旅しているということは、何かわけがあるに違いない。キク雄にとっては、ガラ丸と無事に神乃観山へ着くことが一番大事なことであり、旅の中でいざこざに巻き込まれるのはごめんだ。

「まあ、おたがいこんな裏道を歩いているんだ。①余計な詮索は野暮ってもんでしょう。では、またご縁があったら……」

そっけなくキク雄がガラ丸を引っ張ってさっさと立ち去ろうとする。ところが、マウリたちはあわててガラ丸とキク雄を引き止めだした。

「受けた恩は返さねば」

「こちらの気がおさまりません」

しまいには、

「せめて今日だけでも、一宿お世話をさせていただきたい」

としつこい。マウリとギウリが言うには、ガラ丸とキク雄のために宿をとって、食事をごちそうしたいというのだ。

キク雄は困ってしまった。

宿屋に泊まるとなれば、イ当然だが宿場町に行くことになる。東の都から何日もはなれているとは言え、宿場町の役人には牢屋を脱獄したガラ丸の手配書がまわっているかもしれない。つまり、人目の多い宿場町に行けば、ガ

ラ丸がまた役人に捕まる危険が高まる。それに、このオオカミたちも、悪者ではなさそうであるが、どこまで信用してよいか分からない。

ガラ丸自身は、そんなキク雄の心配はどこ吹く風と言わんばかりに、

「では、遠慮なく。お受けいたします。」

と言ってしまった。マウリたちは大喜びだ。

「せっかくごちそうしてくれるって言うんだから、人の親切は素直に受けておきましょうよ。」

ガラ丸は（　ー　）としている。さっきは「黒い雲の気配がする」と言いながら変な顔をしていたくせに、今度は危機感が少しも感じられない。ガラ丸の中で何が安全の基準になっているのかさっぱり分からない。安全レーダーがぶっこわれているのか、それとも敏感すぎるのか。そうかと思えば、さっきのように、ウ真っ先にやくざ者たちへ突進したりする。キク雄は、ガラ丸のことを「②つかみどころのないお人だ」と思いはじめていた。

越えてきた山を下りたところに宿場町はある。

夕方になると、宿場町のエ街道には旅人を宿へ呼びこむための客引きがたくさん出てくる。次々にかかる客引きの声をかわしながら、マウリがまっすぐに向かった宿で荷を下ろすと、わざわざ店の主人が出てきて

「これはこれは、マウリさま、ギウリさま。おつかれ様でございます。」

と③下へも置かない。どうやらここは、マウリたちのなじみの宿のようである。

「そちらのお二方に、道中助けていただいた。アヤさんとトヨさんだ。」

マウリが宿の主人にガラ丸とキク雄を紹介した。もちろんニセの名前である。

部屋へ通され、荷を下ろしていると、さっそく食事と酒が部屋の中へ運ばれてきた。

ガラ丸とキク雄、ギウリがすでに座っているところへ、やや遅れてマウリが部屋に入ってくる。

「あらためて、今日はお助けいただき、まことにかたじけない。ではお近づきのしるしに。」

とマウリは、キク雄とガラ丸に酒をすすめる。

だが、キク雄はじっとマウリの目を見て、手元の酒を口に運ぼうとしない。

キク雄は、マウリは信用できても、この宿はまだ信用するわけにいかないと考えていたのだ。

キク雄の警戒心を察してか、ギウリの表情にも一瞬の緊張が走る。

悪いがこの酒をいただくわけにはまいりません、とキク雄が断ろうとしたとき、マウリは先手を打つように言った。

「さきほど、手配書を見ましたよ。あなたの本当の名前は『はりがねのキク雄』。ええ、分かっています。そちらの若いおォかたの名前はガラ丸さんですね。『ひさご一味』という盗賊のお仲間だ。この宿の主人がその手配書を私に見せて、『どうしますか』と聞いてきましたよ。」

それを聞いたキク雄が、さっと片膝を立てた。

「まあ、落ち着いてください。」
マウリは、手をあげて言葉を続けた。
「助けていただいたあなたたちを役人に売るほど、このマウリ、腐っちゃいません。本当です。」
そう言って、ゆっくりとキク雄の手にある盃を自分の方へ取り、ぐいっと飲みほした。酒に変なものは入っていないと言いたいのだ。
マウリは、飲みほした盃に、さらに酒をつぎ足す。
「それに、役人がこの宿を取り囲んだとしても、あなた方をつかまえるのは無理でしょう。キク雄さんの先ほどの『あやかしの術』、恐れながら相当な遣い手とお見受けいたします。」
キク雄の妖術を見て、こいつはただ者ではないとマウリは考えているようである。こんな田舎の宿場町の役人では、この二人のカッパを取り押さえることは無理だろうとも。
「なるほど・・・・・」
そこまで聞いてキク雄は立てた片膝をあぐらに組み直した。
「あんたの言う通り、あっしらはお尋ね者の盗賊だ。しかし、あっしらをそれと知ってかくまったとなれば、マウリさん、あんたもただじゃ済まねえ。」
「おれは何も知らない。それでいいではありませんか。なあ、ギウリ。それにここの主人にもたっぷりと小判をやっておきましたから。どうか今日は安心して旅のつかれをとってください。」

マウリがそういうと、となりに座るギウリも笑顔でうなずきながら盃の酒を飲みほした。

「キク雄さん。この人たちを信じましょう。この宿の主人はともかく、マウリさんとギウリさんは悪い人じゃありませんよ。」

ガラ丸の言葉を聞いて、二人のオオカミがうんうんとうなずいている。

「分かりましたよ。どうも、その、ガラ丸さまにはかなわねえや。」

キク雄もようやく打ち解けた。

「ところでキク雄さん、ガラ丸さん……お二人は、もしかして神乃観山へ向かっているのですか？」

図星を突かれ、ガラ丸とキク雄は顔を見合わせるが、次のマウリの一言にもっと驚いた。

「実は、私たちは神乃観山の者なのです。」

「なんと。ではあのオオカミ村の……しかし、なぜ、あっしらが神乃観山に向かっていると思ったんで？」

マウリが神乃観山のオオカミと聞いて、キク雄の先ほどの警戒心は嘘のように薄らいだ。

「神乃観山には、ずっと昔からカッパさんの隠れ家があると聞いています。もっとも、その隠れ家はキツネ村の方にあるので、私はくわしくは知らないのですが。裏道を西へ進むカッパさんで、あやかしの術を使う。これはもう神乃観山に向かっているのではとそう思ったわけです」

「なるほど・・・・・しかし、マウリさん、カッパの隠れ家なんてあちこちにありましてね。なにも神乃観山に限ったことじゃない。それでも、神乃観山の隠れ家はちょいと他とちがう、特別な隠れ家であることはあっしも知っていますよ」

「他とちがうどころか。カッパさんの隠れ家は『奥室の森』にあるのですから。なんと言っても、『奥室の森』というのは、キツネさんたちの聖地です。本来は、だれも入ってはいけない場所です」

また、④とんでもない場所に隠れ家があるものだと、ガラ丸は思った。

「そんな大切な場所に隠れ家があって、キツネさんたちは怒らないのですか？」

「それなんですが、キツネさんたちは、カッパさんのことを『竜神さまの使い』と考えています。奥室の森は、大昔より水の恵みを受けてきました。その水の恵みのおかげで、神乃観山全体も豊かでいられます。『竜神さまの使い』であるカッパさんがいてくれることで、水の恵みを受けやすくなるということです。これはオオカミ村でも言い伝えられていることです」

いつの間にか、マウリとキク雄は酒をたがいに注ぎ合いながら飲んでいる。キク雄に注がれた酒をぐいと飲みほしてマウリが続ける。

「オオカミ村でもキツネ村でも、神乃観山ではカッパさんは神聖な存在なんです。ところが山を下りて町に出てみると、カッパさんたちは、それほど多くはないのですが、他の種族に混じってふつうに暮らしている。何とも言

えない気持ちになりました」

「いやいや、マウリさん。それでいいんですよ。あっしらカッパだって、いいやつもいれば、悪いやつもいる。あっしらみたいな盗賊(とうぞく)もね」

「キク雄さん。おれはまだ盗賊(とうぞく)になったわけじゃ・・・・・・」

「おっと、そうでした。ガラ丸さまがこれからどうするかは、まだ決まっていませんでしたね」

キク雄とガラ丸がやり取りしている横で、マウリとギウリが、深刻(しんこく)な表情で話し合っていた。

「やはりお話しておくべきでしょう」

「もしかしたら、力になってくれるかもしれません」

二人のオオカミは、このような言葉をクかわしていたが、マウリがガラ丸とキク雄にすっと向き直り、

「あなたたちが神乃観(カノミ)山に行くカッパさんと知った以上、話しておかなければならないことがあります。」

真剣(しんけん)なまなざしで語り出した。